over the sky　　before

々々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
over the sky before

【Nコード】
N1845F

【作者名】
々々

【あらすじ】
何ともない日常の中のありふれた恋愛話。彼の聞いていた音楽の意味はなんだったんだろう。

（前書き）

この作品は結構前友人内で三題小説としてに書いたもので、見直しとかしてないので細部拙かったら申し訳ないです。

一応一は完結です。

この物語は、私の語るべき物語ではない。物語には二種類ある。
一つは、舞台の上で大勢の観客が見ている中で行われる物語。ここには喜怒哀楽起承転結の全てがあり、それでいてそれだけでしかない。
一つは、舞台を降り、また、舞台に立つ前の「私」の人生の物語。ここに喜怒哀楽はあるが、起承転結は存在せず、それでいてそれだけではない。
私がこれから語る物語は、後者のモノであり、本来語られるべき前者はここでは語らない。しかし、前者の物語の足掛かりとして、重要な土台として、後者の物語を語ろうと思う。
だからこの物語には「彼」はまだ出てこない。
「彼」が出てくるのは前者の物語だけである。
さあ、それでは物語を始めよう。
やがて幕は開き、やがて幕は堕ちる。そしてそれ以外の語られるべきではない物語を。さあ…。

◇◇◇◇◇

「ほら、ぼーっとしてないでしゃんとしてろ」
ポカン
と言う音と共に、頭に軽い衝撃が走り、私は意識を取り戻した。とは言っても、別に眠っていたわけでもなく、ただぼーっとしてただけ。春眠暁をなんとかだ。
「ふぁぃ。すみましぇん…」
ほら、眠気で口が上手く回らない。

「石黒部員。君がそんなに呆けた顔をしていてどうするのかね？」
そう言いながら私を見下ろしてくる御方は我が部長殿の外山（トヤマ）　勝（スグル）であり、その右手には私を起こす（寝てはいないのだが）ために使ったのであろう、丸められた薄い本のようなモノが握られている。
「わかってはいますよぅ。わかってわぁ」
口を尖らせて言うと
ポスン
と、頭にまた軽い攻撃。
「……部長。馬鹿になったら責任とってくださいね」
「なあに、石黒部員はそれ以上馬鹿にはならないさ。なにせゴフゥッ…」
語尾が掻き消えたのは良心が痛んだからなのだろう。左足に残っている感覚は、まあ、その、なんだ。気のせいということにしておこう。うん。
気がつけば周りからの忍び笑いが聞こえ、そういえば今が部活の真っ最中であることに思い至り、それもいつものことなので、まあ、綺麗に流しておこう。
「さて、余興はここまでにしてだ」
さすがは復活の早い部長。今までのは余興だったらしい。
「来たる三、いや、四？五？六？まあ、数字など単なる数字にすぎないから置いておくが、つまり、高文連に出場する際の台本が完成したわけである。拍手」
わーわーすごいすごいさすがはぶちょうです。パチパチパチパチ
ふぅ。こんなモノで満足していただけただろうか？
「うむ。十分満足であるぞ」
あれ？今私声出した？
「声など出していないぞ気にせぬがよい石黒部員」
そうか。なら安心だぁ。
「さて、また話が逸れかけたが、まあよい。君達にも台本を配ってしんぜよう」

優雅にステップを踏み、部員（総勢８名）に台本を配る。
「では、とりあえず台本を読んでくれたまえ。質問疑問等は随時受け付けようではないか」
どれどれ。表紙は至ってシンプルで題名すら書かれていない。シンプルというかただの白紙だ。表紙をめくる。ふむ。ここも白紙だ。次は…また白紙。なるほどなるほど。今回は無声演劇をやるつもりなのか。
なかなか画期的なことを…
「って、おかしいだろこれ！！！」
バン
と床に台本を叩きつける。
「なんだい石黒部員。ヒステリーかい？」
「白紙の台本渡されたら誰だってヒステリーになるわっ」
「白紙？それはいったい」
どういうことかねと言いながら私の叩きつけた台本を拾い上げ
「ああ、なるほど。これは一般的に言う印刷不備だね。石黒部員。落ち着きたまえ。これは一般的に言う印刷不備だよ」
何故二回言う。というか印刷不備かどうかなんか配る前に確かめておけよ！！！
「石黒部員。女の子なのだからもう少しおしとやかにしたらどうかね？」
言いながら他の台本を手渡してくる。先に中を覗いたが、きちんと印刷されているようだ。
どれ、表紙は相変わらず無地だが、他の部員のもそうなのだから問題は無いだろう。表紙をめくってその裏には、タイトルと役柄が書かれている。
ふむふむ。タイトルは『ロシアより蟹を詰めて』でヒロインは石黒歩。友達Ａ役は中西………ってはぁぁぁっっっ？
バシンッ
叩きつける音三倍増し（当社比）って感じで叩きつける。

「これは、一体、どういう、事、で、す、か、？」
「何の事かね『ロシアより蟹を詰めて』の主役、石黒　歩くん」
「その事だぁっ！！！」
「はて？園子とは誰かね？新入部員か？」
「どうして私が主役なのかって事ですよ！！！」
「部長である私が決めたからだが？」
澄ました顔で言う。一発顔面キメても文句は言われないだろうか？
「まあ、とりあえず読みたまえ。質問はそれから聞こうではないか」
そう言うと自分の台本に目を落とす部長。仕方がなく私も自分の台本に目を落とし、内容を読み始める。
数分後顔を上げたときには、部長の姿は彼の鞄諸々と共に消えていた。まんまと逃げられたらしい。

◇◇◇◇◇◇

帰り、私は一人で帰路についていた。
その胸には、明日部長にどのように攻撃をするかだけを抱えつつ。
と、
「やあ、これはこれは石黒部員ではないか。いやはや奇遇な事であるなこんな所で出会おうとは」
がっしりとひょろりを足して2で割ったような体格の未確認物体（音声識別により部長であると確認）が片手を上げながら唐突に現れる。それまで部長の事しか考えていなかった私は、とりあえず上段回し蹴りを部長の肩口へと繰り出して置いた。部長はそれを避けることもなくもろに受け、それでいて笑顔一つ崩さずに、
「石黒部員。おてんばなのはいっこうに構わんが、あまりお御足を上げすぎるとスカートの中がおのずからのぞけてしまうぞ？」
なんて言いやがった。
「部長、今すぐ地獄へ逝くのと三日かけてじっくり地獄へ逝くのとどちらがいいですか（ニコリ）」

「安心したまえ。高校生にもなってバックプリントだったなどと公言はせぬよ。これでも私は口が硬いことで有名だからな」
「殺す！！！今すぐ殺してやる！！！」
実際バックプリントと言った瞬間から攻撃（主に下段。学習能力はあるのだ）を開始していたのだが、笑顔を崩さずなんなくいなされ続け、精神も肉体もボロボロだった。
そんな一方的な攻防が数分続き、体力も限界が近づくと、
「ところでだ石黒部員」
「はぁっ…はぁっ……な、なんすか？」
「そろそろ余興は終わりにして本題に入ろうではないか」
「…い…今までのは…よ、きょうか…よっ…」
この無尽蔵め
「どれ、ちょうど都合よく公園が近くにあるようだし中に入るかね？ベンチもありそうだが？」
「……了解であります」
大人しくついていこう。今日はもう疲れた。色々。
そこの公園は実際何度か行ったことがある、学校の帰り道にある結構大きめな公園である。
中にはカルガモの親子が暮らしている池もあり、あたりが夕焼けに染まり始めた今などは、たぶんカモ達は池の真ん中で優雅に泳いでいることだろう。その池のすぐ横にあるベンチに私と部長は腰を降ろした。
「ちょっと待っていてくれたまえ。これからお姫様に何か飲み物を買ってきて差し上げようではないか」
そう言うとこちらが声を出すよりも早くベンチから立ち上がり、公園の真ん中辺りの自動販売気が密集している所へと歩いて行った。
本当、こういう所はとことん気が利く男なのに、悲しいかないつもの性格さえなければなぁ…。
なんてことを考えながら、池に目をやる。二羽のカモが付きつ離れつ泳いでいて、自然と目が細まる。そんな暖かな景色に見とれてい

ると
「ひゃぅんっ」
いきなり首筋に冷たい衝撃が走り、意図せず声を上げてしまう。
「これはこれは石黒部員。こんなところでそんな色っぽい声を出すものじゃないぞ？」
声を出させた犯人がそんな事を言ってくる。
「部長、いいかげん私も怒」
「まあ、とりあえずほれ」
拳をワナワナと震わせる私の手によく冷えた缶が手渡される。ジュースの種類はメロンソーダ。そこはかとなく馬鹿にされている気がする。
「…ありがとうございます」
それでもきちんと御礼を言う私は偉いと思う。
「うむ。礼は先ほどのバックプリゴフッ」
うん。綺麗な裏拳。自分に百点満点上げちゃおう。
プルタブを開け、ゴクリと一口。うん。美味しい。
「ぷはーっ」
「石黒部員。いい飲みっぷりではないか」
「……部長は不死身ですか？」
「或はそうなのかも知れぬなぁ」
朗らかに笑う。笑っていると先輩であることが信じられないくらいかわいらしい顔になる。年上で背も私より高くてなにより男なのに、そういうのは本当にズルイと思う。
それからしばらくの間、私と部長はなんでもないような普通の話をし、そうしているうちにも、春になり少しは日が長くなったにしてもまだ短さを感じさせるように辺りは段々と藍色に染まり、カモ達も巣へと帰ったのか姿が見えなくなっていた。
「部長」
「なにかね」
「私にヒロインなんて成り立つのでしょうか？」

「ああ、そのことならモーマンタイだと思われるぞ？」
「モーマンタイってなんですか？」
「うむ。最近の若いモノは知らぬのか。モーマンタイって言うのは問題が無いと言う意味で感じでは無問題と書くのだ。後生のために覚えておきたまえ」
「はあ…」
「なに、私は常に人ができる以上の事は期待せぬよ。それ故石黒部員にはヒロインを任せえるだけの実力があると見込んでこの配置にしたのだが、さて、問題があるかね？」
「……いえ。無いです」
部長は笑顔の他にもうひとつ、こうやって演劇について語っている時にも、とても楽しそうな、無邪気で幼い顔立ちになるのだ。そしてそんな表情で笑いかけられながらあんなことを言われたら、それまで持っていた文句も不安も愚痴も全部無くなってしまうのは仕方がないだろう。
「本当、部長はズルイ人です」
「ん？何か言ったかね。石黒部員」
「いいえ何もいってませんよ～」
そう言ってベンチから腰を上げ、空になった缶を持っている手と逆の手を部長に差し出す。部長は笑いながら私の手をつかみ、つかんでいない方の手に体重をかけて立ち上がる。
「かえりましょうか」
「ああ。そうするとするか」
そのまま二人で帰路についた。
家は二人とも同じ方向で、公園からはあっという間。
こんな時間がいつまでも続けばいいなと私は願った。空はもう、星達が支配をしていた。

◇◇◇◇◇◇

話せば長くなるから短くして話すが、私と部長はいわゆる幼なじみである。
小さい頃からの知り合いで、いつまでだったかはお兄ちゃんと呼び、やがて勝君になり、外山先輩になり、今では部長と呼ぶようになった。そして今年の受験で部長は東京の大学を受けるらしい。自慢じゃないが部長は頭脳明晰で私は運動馬鹿。同じ高校に入れただけでも奇跡だったのに、同じ大学なんて狙えるはずがない。でも、部長と離れてしまったら、私は部長をなんて呼べばいいんだろう？部長は私をなんて読んでくれるんだろう？もしかしたらもう私のことを呼んでくれなくなるのかな？それは嫌だな。それはイヤだな。それは　　　だな…。
そして私は目が覚めた。
こうしてまた同じ一日が始まった。

◇◇◇◇◇◇

台本が渡されてはや一ヶ月。私たちはそれぞれの役作りに励んでいた。因みに演劇の内容は部長が書くのは珍しい恋愛モノで、ヒロインが私で相手役が部長なものだから、これは部長に期待しちゃっていいって事なのかな？なんて思ったりもした。べ、別に部長が好きだとかそういう意味ではないからね！！！
ってことで、役作りに励んでいるのだが、これがまあなんというか、ふざけんな。という感じだ。
第一、高校二年生の女子生徒にひたすら蟹の缶詰をつくる人間の心情なんかわかるか！！
って感じだった。
そもそも25才っていう設定からして無理があるだろ他の部員は変に思わないのかなんか言えよ突っ込めよっ！！！
「こら！！！石黒部員！！！！科白はどうした！！！」
「す、すみません！！！」

台本に目を向け科白を読む。
「『ああ、神様。私は何故このような事をしているのでしょう』」
本当だよ。
「『こんな事をしていてもあの人に我が気持ちは伝わりませぬ。これが私の本来の姿なのでしょうか？これが私の彼が望んだ姿なのでしょうか！？』」
「よし。やはり石黒部員は真面目にやればよいのだ。では次、中西の科白だ」
そんなこんなで、毎日の練習は続いていく。

◇◇◇◇◇

さらに一月がたち、部分部分ではあるが少しずつ動きを入れた練習が含まれるようになってきた。動きながら、皆に、観客に声を届かせる。これはかなり大変な事であり、私が苦手であることでもある。基本的に私は二つ以上の事をこなすことが驚異的に苦手で、しかも不測の事態に身体が動かなくなるというとんでもない弱点というか欠点のようなモノがある。だから本番まで何ヶ月もかけて、科白と動作を「一つのモノ」として認識できるようになるまでやり込まなければならないのである。

しかも今回は主役であり、主役であるからには科白も動作も沢山あり、かなりピンチな状況であった。それでも以前先輩に言われた「お前じゃなきゃできない（脳内過剰脚色あり）」と言う言葉と「無問題」の二つの言葉が支えとなり、なんとか頑張ってこれている。
部活が終わり、帰る準備をしていると、部長が先生に呼ばれ、部室を先に出て行った。
私は部室に残った部長の鞄を見、すぐさま頭を働かせ、一つの事が思いついた。それは私にとってとても愉快な事だし、部長をからかえると思うとさらに愉快でもあった。

私は急いで鞄を持つと、一人で部室を出た。そしてそのまま帰り道を通り、少し行った所の電柱の後ろに立つ。向こうから歩いてくる時には丁度死角になる。以前に部長が帰りに待っていてくれた時に気がついた場所だった。
私はそこでしばらく待った。待っている間はただただ驚いた顔をする部長が楽しみで、あっという間の出来事に感じた。
やがて向こうから人影が近づいて来た。遠くても逆光でも見間違うことのない、紛れもない部長の姿だった。
ゆっくりとこっちへ近づいて来て、少しずつ影が大きくなる。やがて肉眼でもはっきりと見えるようになり、とうとう私のいる電柱を追い越した所で、
「やっ、部長さん。奇遇だね、こんな所で会うなんて」
と、声をかけた。思っていたよりも大きな声が出て、自分でも驚いた。
「おおっ。これはこれは石黒部員ではないか。こんなところで出会うとはまことに奇遇であるなぁ」
振り返った部長の顔にはいつもの笑顔が浮かんでいた。こっちを向いたときに陽射しがまぶしかったのか、目を少し閉じている。
「本当に奇遇ですねえ。奇遇ついでに一緒に帰りませんか？」
「なるほど。石黒部員もいいことを言うではないか」
こうして二人で並んで家路につく。春の夕暮れと夏の夕暮れはどこか違った空気をまとっていて、夏のそれである今も、どこか違った空気の中を肩を並べて（物理的じゃなく精神的だが）二人で歩いて行き、その中で沢山の言葉が紡がれていく。それは学校の勉強の事だったり、この夏流行りのドラマの事――あの役者は演技が下手だ。この脚本家は先が見えすぎている。いや、それがまた良いのだ等。だったり、そして、演劇の事だったりした。
やがて家も近くなり、それは必然的に二人が離れる事を意味し、何故かわからないが私は部長をあの公園のベンチで話さないかと誘っていた。

部長も虚をつかれたようだったが、笑顔で
「石黒部員の頼みとあらば断るわけにはいくまい」
と言い、ついてきてくれた。
私がベンチにつくと、
「それでは私はお嬢様のためにお飲みものを買ってきましょう。しばしのお待ちを」
そんな言葉を残して、自動販売機の方へと歩いていく。池に目をやると、春にはまだ小さかった二匹のカモが、今はもう結構大きくなって二人で仲良く寄添い泳いでいた。それを見ていると、暖かな気持ちと、ほんの少しの嫉妬感を心の中に感じていた。
なんとなく後ろの方に気配を感じて振り向くと、まさに私の首筋にジュースの缶を当ててこようとしている部長の姿がそこにはあった。
「残念でした。私は二度も同じ手に引っ掛からないのです」
胸を張って言うと、
「なるほど。君のそれは褒めるべき長所であることを認めようではないか」
と、笑いながら言う。
手にしているのはメロンソーダの缶。差し出していない方の手にはブラックの缶コーヒー。
「部長～。どうして私はメロンソーダなんですかねぇ」
「おお、聞きたいかね石黒部員。石黒部員がそこまで頼むなら致し方がない。教えてしんぜよう」
妙に芝居がかった動作で手を広げる部長。笑顔が、段々と無邪気で幼いモノに変わっていき、
「それはだね。君がバックプリントだからだよ」
「聞きたくなかったよっ！！！」
ガスン
とおもいっきり飛び膝蹴り。残念ながら顔には届きそうになかったので、鳩尾に入れておいた。これでしばらくは余計な口は叩けまい。
結構モロに入ったらしく、倒れる際に

「石黒部員…なかなか腕を上げおったな……ガクリ」
と言っていた。まぁ、自分でガクリと言えるくらいならまだまだきいていないのだろうが。
それにしても、と、私は思う。
こんな時にそんな事を思い出す部長にしてもそうだが、今日に限ってまたバックプリントをはいてきた自分に対してもである。だからさっき蹴っ飛ばしたのの半分は照れ隠しだ。まあ、それを部長に教えてやるつもりも無いが。
と、そんな事を考えているとすぐ隣から音楽が聞こえて来た。
初めは何かわからなかったが、しばらくして部長が歌っているのだと気がついた。
その音楽は、私は一度も聞いたことのない音楽だったし、しかも鼻歌だったため、それが日本の歌なのか、他の国の歌なのか、或は部長が作った歌なのかさえわからなかった。
それはただ、不器用な音の連続音。なのに何故か強く心に響いた。
部長が歌い、私は聞く。何分かわからないがその旋律は続き、最後に余韻を残し、歌が終わった。
数瞬の沈黙の後
「いや、すまない。つまらないモノを聞かせてしまったな」
と、照れ臭そうに鼻の頭を掻く。
「つまらなくなんか無かったですよ」
私もなんだか照れ臭くなり、すこしツンとした感じで言ってしまう。
空白が続く。話したいことは山ほどあるはずなのに、言葉となって口を出てくれない。
やがてポツリと
「私はだね、石黒部員」
部長が呟く。
「私はたぶんこのまま高校を卒業をするだろう。その時はたぶん、東京の大学に入学す
「部長！！！」

私は無理矢理部長の言葉を遮る。
たぶんその言葉は私には早すぎるし、その言葉は私にはつらすぎる。
だから今その話を部長にされては困る。私にはまだその言葉を受け入れられない。
「部長……」
でも、他に言葉が思いつかない。今部長と話さなければいけない言葉はなんだろう？どうしたら部長の声をこちらに向けさせられる？
どうしたら部長の心をこちらに向けさせられる？
「えっと……あの…」
そこで不意に思いつく
「そうだ、部長。今度の演劇の最後のシーンの流れというか動きというのが今一つ上手くつかめないので、教えてもらえませんか？」
この言葉の中に嘘はない。
あの部長が書いた『ロシアより蟹を詰めて』のラストは、ハッピーエンドではなく、どちらかといえばバッドエンドである。特にラストは極寒の海に自ら身を差し出さなければならなく、そこに至る心情表現などはもはや私の想像力の範疇を越えていたのだ。
だからきっとここでこの質問をしたのも間違ったことではない。私は最初からこれが聞きたかったんだ。と、自分に言い訳をした。
「……そうか。あのラストがわからぬか。ならばそうだな。今ここで一度実際にやってみるかね？」
「そ…それはさすがに…。ほら、周りの目もありますし」
「なに、この辺には人はあまりこぬよ。ほら
『何故だ。何故貴女はここで身を投げなければならぬのか。私にはわからぬ。理解などできぬ。何故我々は結ばれてはならぬのだ！！！』」
「『それは仕方のないことなのでございます』」
いきなり科白を読み始めた部長につられて演技を始めてしまう。
「『仕方がない？それは貴女のような方が口にしていい言葉ではありませぬ』」

「『しかし私には、もう本当に仕方がないのでございます』」
「『何故だ。何があろうとも私は貴女を護ると、そう、誓ったではありませぬか』」
「『それでも、貴方は私を護ることはできなかったのです』」
一歩足を踏み出す。
「『何故だ。私は全てを失い全てを費やし全てを貴女のために使ったではありませぬか。それなのに一体何がご不満なのだ』」
「『貴方にはわかりませぬ。貴方には一人男を待つ女の気持ちがわかりませぬ。貴方にはどんなモノよりもただ一言を聞きたい女の気持ちがわかりませぬ』」
もう一歩前へ。
その先には池がある。
「『駄目だ。だからといってはやまってはいけない。こんな所で我々は別れてはいけない』」
「『それでも、私は死ぬしかないのです』」
もう一歩。そしてとうとう池の淵に立つ。
「『そんなことは…ない』」
「『それ
「私は全身全霊を持って貴女を愛している」
……えっ？
「私の前にいかなる障害があろうとも、私は必ず貴女のもとへ行き、必ず護ってみせる」
違うよ。本当ならそんなことはないで科白は終わりだよ。なのに、部長。一体何を言って…。
「さあ、それでも貴女は、本当に先に逝ってしまうのか？」
「それとも、私と共に生き、私と共に日々を送ってくれるか？」
部長が一歩私に近づく。
私は…。私は……。
「『私は、それでも……』……一緒に生きてもよいのでしょうか…」
違う。こんなの台本にはない。

「ならば、こちらへきてくださいませぬか？ロシアの海は寒い。落ちては大変だ」
そうだ。台本では私は海に落ちなければならないんだ。だから台本通りに…
「石黒部員！！！！！」
部長の叫び声と、おかしなくらいゆっくりと落ちていく感覚。部長は落ちていく私を見てとても驚いている。大丈夫ですよ、部長。ここは公園の池なんです。
寒くもないし、深くもない。だから、そんな顔をしなくても、そんな泣きそうな顔をしなくても、いいんです、よ？
バシャン
と、背中から池に堕ちる。
冷たい水が顔にかかり、思っていたよりも池の水深は深く、なかなか地面に背中がつかない。そういえば着衣水泳って泳ぎづらいんだよなぁ…。これ制服だから乾かさなきゃ…。あれ？おかしいな。息が苦しいや。早く上にあがらなきゃなのに身体に力が入らないや…。変な……の…。
私は意識を失った。

◇◇◇◇◇

頬を叩かれた。
耳元では何故か部長が大きな声で私の名前を呼んでいる。
思い瞼を開けると、上半身裸の部長の姿が目に入ってくる。
「あ……ぇ？ぶちょ……？な……で泣い……？」
声が上手く出ない。
部長は私の声が聞こえると、私に顔をよせ
「馬鹿野郎！！！石黒部員は泳げないだろうが！！！勝手に飛び込みやがって！！！勝手に意識失いやがって！！！人工呼吸しても心臓マッサージしても全然反応しなかったくせに！！！ふざけるなよ

「……！！！勝手に一人で逝こうとするなよ！！！」

何度も何度も私のことを怒鳴り付けた。

私はそんな事よりも、部長が泣いていること。部長を泣かせてしまったことが悲しくて、泣き出してしまった。

泣きながら、この辺には本当に人がいなくてよかったと心から思った。

◇◇◇◇◇

しばらく二人で泣き続け、やがて泣き疲れ、そのうちに互いの泣き顔が笑えてきて、クスクスと笑いあった。

笑っているうちにだんだん頭も冷静になって来て、お互い恥ずかしくなり、気まずい沈黙が流れた。

「……」

「……」

「……人工呼吸」

「……え？」

「……人工呼吸したんすよね……」

「あ、ああ……まあ……な」

「私の…ファーストキスだった……んすよ？」

「ああ……そうか」

「責任…とってくれるんすよね？部長」

「あ……ああ。その、なんだ。私でいいのなら……」

「部長なら……いや、部長だからいいんす……よ」

「そうか……」

お互いがお互いを見る。

よく考えたらとんでもない恰好だ。男は上半身裸でズボンはビチョビチョかと思えば、女も女で上も下も制服がビチョビチョ。

自然と、かどうかはわからないが、まあ、しょうがなかったんだ。

二人とも若かったからかもしれないし、夏の夜だったからかもしれ

ない。まあ、詳しい描写をしても別に良いもんじゃないし、第一他人には見せるべきでは無いだろうから、ここではもうこの後の事については何も言わないことにする。
ただひとつ言えるのは、この公園に夜に来る人がいなくてよかった。ということだけだ。

◇◇◇◇◇

「あの日」から数日がたち、私と部長はいつも通りの生活を送っていた。私と部長が恋仲になったことに周りは気がついていないのか、それとも前からそのように見えていたのかはわからないが、まあ、何事もなく平和で幸せな毎日が続いていた。私はたぶんこんな日がずっと続くんだろう。どんな困難も二人でなら乗り越えていけるのだろうと確信していた。
けれど、世の中はそんなに甘くはなかった。神様はそんなに優しくはなかった。
ついに、終わりの日がきてしまったのだ。
或は、始まりの日が。

◇◇◇◇◇

その日は丁度高文連の大会の一ヶ月前で、その日は丁度部長の１８回目の誕生日で、その日は丁度日曜日だった。だから私と部長は二人で出掛けることになっていた。
未だに呼び方もお互い部長と石黒部員で、ただ両想いになれたことで特別に変わったことは無かったけれど、それでも毎日がとても幸福だった。
この日も私にしては珍しく、白のワンピースに、大人しい赤い色をしたハイヒールを履いて、部長の所へと向かった。
これが全ての終わりへの第一歩だった。

私と部長はまず映画館へ向かい、流行りの映画を観て、観終えると近くの軽食屋に入り、先ほどの映画の感想――あのシーンは嘘くさすぎるあの新人の演技はひどかった音響はやはり素晴らしいそれにしても終わり方がわからなかった等々を話し、食事を済ませた後は近くの小物店で演劇に使えそうな小道具を探し、最後に部長の希望であの公園へと向かった。

あのベンチの周りにはやはり人影はなく、今日は私が買ってくると言って、自動販売機に向かった。

沢山ある飲み物の中から、私にはメロンソーダ（なんだかんだ言って好きなのだ）を、そして部長にもメロンソーダをかって、部長のもとへと歩いて行った。途中、部長のをしっかりと振っておくのを忘れずに。

さて、首筋に冷たいのをつけてやろう。と、忍び足で近づく。あと一歩。あと一歩で手が届く。といったときに、また部長の歌う鼻歌が聞こえて来た。

最近部長はよくこの歌を歌っていて、自然と覚えてしまったほどである。

聞けば聞くほど優しい音楽で、歌えば歌うほど哀しい音楽だった。

私はすぐ後ろで聞き、歌が終わるのを待つ。やがて余韻を残し、音がやむ。そしてそれと同時に部長に缶を差し出した。

意地悪はしないことにした。

「おお、石黒部員。これこれはまた、お待たせしてしまったね」

「いえ、気にしないで下さいな」

プルタブに指をかけて開ける。メロンの香りが広がる。

「ほう。私もメロンかね。ふむ。初の試みであるな。いざ、尋常に勝負！！！」

プシュゥッ

勢いよく中身が飛び出て、そういえばさっき振ったんだっけと思いだし、キョトンとする先輩の顔がかわいらしくて、思わず笑ってし

まう。
「ふふふ…。ふふふふ…。」
なにやら先輩も不適な笑い声を上げ、
「なかなかやってくれるではないか石黒部員。どうやら私は少し部員の事をなめていたらしい。ええい！！！覚悟したまえ！！！」
そう言ってガバッと立ち上がると、私の方へと近寄ってくる。私は怖がるふりをして立ち上がり逃げ出す。
後ろから部長が追い掛けてくる。
よし、このまま走ろう。逃げて逃げて逃げまくって、それでも捕まりそうになったらこっちから部長の胸に飛び込んでいってやるんだ。そうしてぎゅっと抱きしめて、何度でも好きだって言ってやるんだ。だからほら、早く捕まえてよ。こっち、こっち、こっちだよ。あれ？部長どうしたの？そっちに行くなって？危ないからこっちに来いって？大丈夫。こっちには池はないよ？あるのは私と部長二人だけの道だよ？だから早く捕まえてよ。
え？

なに？

危な　　　　い？

部長が大声で私の名前を呼んだ声が聞こえたきがした。でもその声は　　　　によって、大音量のクラクションとブレーキ音によって掻き消された。

◇◇◇◇◇

私の目の前を、部長の身体が舞った。変にゆっくりと。変にじっく

りと。
数メートル先に部長は横たわった。
誰かの怒鳴り声が聞こえるけど、何を言ってるんだろう？よく聞き取れないや。
私は部長のもとへと歩いていこうとしたけど、足が思うように動かなかった。
おかしく思って足を見ると、どっちもおかしな方向に曲がっていた。なるほど。これじゃあ歩けないや。仕方がないから這っていこう。
大丈夫。すぐそこだから。
数メートル先に横になっている部長は、何故だか知らないけれど綺麗な身体を保っていた。見た目に損傷はなく、血も何も滲んではいない。そうか。よかった。大した怪我じゃなかったんだ。
一歩近づく
なんでだろう？両足がすごく熱いよ。どうしたんだろう。
一歩近づく
「部長…」
駄目だ。まだ遠い。
一歩近づく
あれ？なんで涙が出てくるんだろう？
一歩近づく
一歩近づく
一歩近づく
「ねえ、部長。聞こえる？聞こえるよね？私ね、本当に昔から部長の事が好きだったんだよ？そして今も、かわらずね。ねえ、部長。返事、してよ。ねえ、ねえ、ねえ！！！どんな時でも護ってくれるんだよね？どんな時でもそばにいてくれるんだよね？ねえ部長！！！何とか言ってよ！！！部長は私のファーストキスを奪ったんだからね！！！他にも色んなモノだって奪って行ったんだからね！！！責任取ってくれるって約束したよね？きちんと約束してくれたよね？ねえ、ねえ、おい！！！返事しろよ！！！部長！！！お前不死身

なんだろ！！！前自分でそう言ってたんだろ！！！不死身なら死ぬわけが無いだろうが！！おい！！！起きろよ！！！お前は大嘘つきなのか！！！おい！！！おい！！！仕方がないなんて言わせないって言ったのはどこのどいつだよ！！！護るって言ったのはどこのどいつだよ！！！私を全身全霊を持って愛するんだろ？どんな障害があっても必ずきてくれるんだろ？私と共に生き、私と共に日々を送ってくれるんだろ？勝手に意識失うなよ！！！勝手に一人で逝こうとするなよ！！！部活はどうするんだよ！！！私が『ロシアより蟹を詰めて』の主役なんだろ！！！お前はその恋愛相手なんだろ！！！何のために今更になって台本書き換えたんだよ！！！何のためにバッドエンドからハッピーエンドに書き換えたんだよ！！！私と部長のためだろ！！！ただ二人のために書き換えたんだろ！！！そのせいで迷惑かけた部員にはどう謝るんだよ！！！部長がいないで私はどうなるんだよ！！！私は！！！私は！！！私は誰のために生きればいいんだよ！！！なあ！！！なあ！！！なあ！！！！！！答えろ！！！答えろよ！！！いい加減目を覚ましてくれよ！！！！！！！！！！」

いくら声を掛けても部長は一切反応を示してくれなかった。
私はそれでもただずっと、部長に怒声を浴びせ続けた。
救急車が来るまでの十分間。
ずっと…。
ずっと…………。

◇◇◇◇◇

部長が死んで、三年がたった。
私はようやく人前に出れる程に精神を回復した。

あの事故で私は多くのモノを失った。

部長
幸せな日々
平穏な日々
表情
そして、両足。

始めの一年はひどかった。
毎日同じ悪夢を見た。
部長が死んだことは信じられなかった。
信じられるようになったのも、つい最近の事だ。
即死。
だったらしい。
痛みを感じる暇すらなかっただろうと、お医者さんは教えてくれた。
それならまだよかったのかもしれない。
ごめんね。
私は呟く。
ごめんね。
ごめんね。
ごめんね。
ごめんね。
部長は私が殺した。
そう思うことしかできない。
部長の両親は仕方がなかったのだと言う。
貴女を護れてよかった。
あの子は幸せなはずだ。
でもそんなのは嘘だった。
両親の目には憎悪が。
何故コイツじゃ無くてうちの子が。

そんな言葉が浮かんでいた。
部長の両親はその後引っ越したらしい。
どこに行ったのかは教えてもらえなかった。
死んだ魚のように二年を過ごし、今年の二月にようやく私は普通に戻った。
まだ万全じゃあないけれど、それでも、幾分か、は。
それから私は車椅子によるリハビリを受け、今では楽に乗れるようになった。
そして今日は退院の日。
奇しくも部長の誕生日であり、命日でもあった。
だから私は花をささげに、公園の前に来た。
公園の姿はあの頃と変わらず、自動販売機の密集地帯も目に入ってきた。
まだメロンソーダはあるのだろうか？あの頃のベンチは残っているのだろうか？あの頃の匂いは。あの頃の風は？
私は目を閉じた。
頬には涙の粒が一筋こぼれた…

◇◇◇◇◇

この数瞬あとに、私の車椅子がとある人間によって叩かれる。
そしてここから、私と「彼」との、本来の語られるべき物語は始まるのであるが、今、この語られるべきではない物語の中では、やはり語られるべきではないのだろうと思う。
ただ一つ言えるのは、舞台の上だけがその役者の人生では無いという事だ。
それぞれの役者には、それぞれの舞台の他にも物語が存在しているという、これはそういう物語だ。
だからそろそろ私は舞台に上がり、人に見せるための物語を演じようと思う。

けれどその中で、部長の影を思い浮かべるのは許してほしい。
役者だって結局は、ちっぽけな人間にすぎないのだから。
それでは最後に一つの話を加えておしまいにしましょう。

部長が死んで、部長の両親が部屋を片付けたときに出て来た、私あての封筒についてです。
部長の両親は、中身を見ることもせずに、私に渡してくれました。
理由は部長が生きている頃に書いたモノだから。
だそうです。
封筒の中には一枚のＣＤが入っていました。
その曲は、部長がよく口ずさんでいた曲でした。
そのＣＤと共にに入っていた部長からの手紙の最後の文で、この物語は終わりにします。

私にもどこの国の言葉かはわからぬのだが、題名は日本語に訳すればこうなるらしい。

「ソラの上」

（後書き）

長文駄文読んでいただき感謝であります。

この作品は　ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　ｓｋｙ　という作品の構想が以前からありまして、本来ならこの作品はそのあとに語られるべき物語だったりします。なんてったって、思いっきりそっちの核心に迫る内容に触れてますから。

しかし、本篇の方が、なんとまあ、全く書けない病を発症して早数年がたっちゃいまして、今回泣く泣くこの作品を先に投下↓やる気だそう！　みたいな感覚だったりします。

本当はいろいろ語りたいこととかあるのですが、それはこの場では相応しくないので、また別の機会に何らかの形でそのこともかければいいなと思っていたりします。

ここ最近は長いこと筆を休めていたのでこれからまた書き始めて昔みたいにかけるかどうか不安ではありますが、もし少しでも気に入ってくれた人がいてくれたらすごくうれしいことです。

それでは、長々と失礼しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1845f/

over the sky　　before

2011年1月19日01時52分発行